PICK UP MOVIE

©2020 E.x.N K.K. / ever rolling films

海辺の彼女たち

〔2020 年／日本＝ベトナム／ベトナム語・日本語／ 88 分〕 脚本・監督・編集：藤元明緒　出演：ホアン・フォン、フィン・トゥエ・アン、クィン・ニュー 他

“生きていく。この世界で――”

日本の片隅で不法に働くベトナム人女性たち――
きらめく未来を夢見て、過酷な現実と闘う姿に心揺さぶられる物語

〔あらすじ〕技能実習生として来日した若きベトナム人女性のアンとニューとフォンはある夜、搾取されていた職場から力を合わして脱走を図る。新たな職を斡旋するブローカーを頼りに、辿り着いた場所は雪深い港町。やがては不法滞在となる身に不安が募るも、故郷にいる家族のためにも懸命に働き始める。しかし、安定した稼ぎ口を手に入れた矢先にフォンが体調を壊し倒れてしまう。アンとニューは満足に仕事ができないフォンを心配して、身分証が無いままに病院に連れて行くが――。

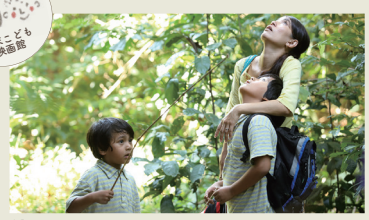
〔上映日程〕6/5~18（休映：6/7、14）

6/6・藤元明緒 監督　登壇決定！

映画上映：18:15~19:43
舞台挨拶：19:45~20:15

合わせて観たい！

週末こども映画館



©E.x.N K.K.

ミャンマー緊急チャリティ上映！

僕の帰る場所

〔2017 年／日本＝ミャンマー／日本語・ミャンマー語／ 98 分〕 監督・脚本・編集：藤元明緒　出演：カウン・ミャッ・トゥ、ケイン・ミャッ・トゥ、アイセ、テッ・ミャッ・ナイン、來河侑希、黒宮ニイナ、津田寛治

“いつか会える、その日まで――”
日本とミャンマー、二つの国で揺れる家族の愛の物語

〔あらすじ〕東京の小さなアパートに住む、母のケインと幼い二人の兄弟。入国管理局に捕まった夫アイセに代わり、ケインは一人家庭を支えていた。日本で育ち、母国語を話せない子ども達に、ケインは慣れない日本語で一生懸命愛情を注ぐが、父に会えないストレスで兄弟はいつも喧嘩ばかり。ケインはこれからの生活に不安を抱き、ミャンマーに帰りたい想いを募らせてゆくが――。

〔上映日程〕6/5~18（休映：6/7、13~14）

〔鑑賞料金〕（一般）¥1,500　＊その他通常通り／年パス利用可

「週末こども映画館」推薦作品につき、お子様連れの大人の方１名につき、鑑賞料金一般 ¥1,200 にてご案内致します。

弱い立場の人を救える社会を

コロナ禍以前の話になるが、私の住んでいる小諸でも、ちょっと目を凝らせばすぐ身近に技能実習生たちがいた。春先のある日、文化センターに突然5, 60 人もの中国人青年があらわれ、大声の中国語で注意事項などを説教され、農繁期の職場へと三々五々連れ去られていく。他のさまざまな国から来て地元企業で働く人もいて、私は 3 年間ほど数人にボランティアで日本語を教えながら、わずかではあるが彼らの実態を見聞きした。

『海辺の彼女たち』は、技能実習という美名のもとに、安価な労働力として日本に送り込まれた 3 人のベトナム人女性の話だ。技能実習制度に対しては現代の奴隷制度だという批判もあるが、映画でたんたんと描かれる彼女たちの日常のありさまは、それもあたっていると思わされる。そんな状況でふと滲み出る彼女らの真摯さや思いやりが胸を打つ。

同じような制度は韓国や台湾にもあるそうだが、それらと比較しても日本のやり方は欠点が多い。実習生の送り出しや受け入れにも、実習生と雇用主の契約にも、国が責任と実効ある形で関与していないからだ。だから映画のなかの彼女たちは、賃金さえ正当に支払われない職場から逃げ出すしかなかった。パスポートも在留カードも雇用主に取り上げられたままで、そのため不安定な身分に陥った彼女たちが頼れるのは、違法行為に手を染めた同国人だけということになっていく。

彼女たちは貧しい家族の犠牲となって来日している。そして日本ではなんら公的な支援も受けられずに、さらに苦境へと追いやられていく。そういう人たちにどんどん苦難をしわ寄せしていく社会はやはり嫌だ。最近話題になっている入管法や非正規労働など、放置されている問題が多すぎる。もっと自分たちの人権を重視し、地続きになっている弱い立場の人の人権を守っていかなければと思う。

tamura shizue
田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。